

7:1 名声は良い香油にまさり、死ぬ日は生まれる日にまさる。

7:2 祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。

7:3 悲しみは笑いにまさる。顔が曇ると心は良くなる。

7:4 知恵のある者の心は喪中の家であり、愚かな者の心は楽しみのある家にある。

7:5 知恵のある者の叱責を聞くのは、愚かな者の歌を聞くのにまさる。

7:6 愚かな者の笑いは、鍋の下の方のはじける音のよう。これもまた空しい。

7:7 虚げは知恵のある者を狂わせ、賄賂は心を滅ぼす。

7:8 事の終わりは、その始まりにまさり、忍耐は、うぬぼれにまさる。

7:9 軽々しく心を苛立たせてはならない。苛立ちは愚かな者の胸にとどまるから。

7:10 「どうして、昔のほうが今より良かったのか」と言うてはならない。このような問いは、知恵によるのではない。

7:11 資産を伴う知恵は良い。日を見る人に益となる。

7:12 知恵の陰にいるのは、金銭の陰にいるようだ。知識の益は、知恵がその持ち主を生かすことにある。

7:13 神のみわざに目を留めよ。神が曲げたものをだれがまっすぐにできるだろうか。

7:14 順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。これもあれも、神のなさること。後のことを人に分からせないためである。

伝道者は神の存在に心が向くように、視点を変えようとしています。「喪中の家に行くほうがよい」、「悲しみは笑いにまさる」というように、読者の心に気付きを与えようとしています。実際に人間の感じ方には、当たり前になってしまい、そこから真実を見抜く力が失せてしまっていることがあります。心や感受性までもパターン化してしまい、その人生観から抜け出せないことが多いのです。

自分の生活パターンを見直したり、または心が無意識に求めてしまうパターンを、これでいいのかと見直す必要があります。それはすなわち、知恵ある者の叱責を聞くこと、「愚かな者の笑い」、「事の終わり」を考えること、「忍耐」を尊ぶことによってできるのです。

ここにある教えのリストをかみしめて、現実のなかに大切な価値観を、新たに発見しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

